読書感想文コンクール　小学校1・2・3年生の部

入選

竹井　希（たけい　のぞみ）みなみ野君田小 3 年生

作品名：やさしいホタル

図書：とべないホタル

　家の近所の緑地でホタルがとぶのを見たことがあります。おしりを光らせてすーっととぶすがたが、とてもきれいでした。「とべないホタル」なんているのかな、と気になって、読んでみることにしました。
　主人公のホタルは、羽がちぢんでいてとぶことができません。そのために人間の男の子につかまりそうになってしまいます。その時、一ぴきのホタルがさぁーっとおりてきて、男の子の手にとまりました。とべないホタルのみ代わりになってくれたのです。
　ぼくはこの場面を読んで「みがわりになったホタルは、ゆう気があってやさしいな」と思いました。人間につかまったらどうなるかわからないのにみ代わりになるなんて、ぼくにはぜったいにできません。でも、ゆうきがあってやさしいホタルは、一ぴきだけじゃなかったのです。
「ぼくが先に出ていこうと思っていたところだったんだ。」
「わたしもよ。わたしも行きたかったわ。」
　ほかのホタルたちは、さいしょはとべないホタルがとべるようにはげましていましたが、そのうちにみんなどこかへ行ってしまいました。でも本当は、ずっと近くで見まもりながら、たすけてあげられないか考えていたのです。とべないホタルはなみだでいっぱいになった目で、みんなをいつまでも見おくっていました。みんなが自分のことを思ってくれるやさしい気持ちを知って、本当にうれしかったんだと思います。ちぢんだ羽もとべないことも、どうでもいいと思うようになっていました。
「ぼくがもしとべないホタルだったら」、と考えてみました。みんなが当たり前のようにできることがぼくだけできなかったら、くやしいしかなしいです。でも、その時に友だちがぼくのことを思っていてくれたり、たすけてくれたりしたら、やっぱりうれしいだろうなと思いました。

今ぼくは、クラスの友だちのことを気にすることはあっても、こまっている友だちに自分から声をかけてたすけてあげるということが、あまりできていません。この本を読んで、ホタルたちのように、やさしい気持ちでみんなをたすけてあげられるようになりたいと思いました。